

尼崎市支え合いを育む人づくり支援事業 教育・研究活動事業実績報告書

教育・研究活動名	「いのち」を考える 阪神・淡路大震災の記憶を通して～			
申請大学・高校等名	大学及び高校等名	関西国際大学		
	活動グループ名	SL-B(「いのち」を考える 阪神・淡路大震災の記憶を通して)	参加学生等人数	24 人
指導責任者名及び連絡先	学部・学科等名称	国際コミュニケーション学部英語コミュニケーション学科		
	責任者氏名	横山雅彦	連絡先電話番号	
	E-mail			
協働する市民活動団体及び代表者名	団体名	社会福祉法人阪神共同福祉会		
	代表者氏名	理事長 中村太蔵	連絡先電話番号	
	E-mail			
教育・研究活動目標	本授業では、以下の学習目標を設定します。 阪神・淡路大震災の記憶を通して、「生と死」、「いのち」の問題について考えることを目標とする。今回、中心となる国際コミュニケーション学部の学生が、被災者から直に被災体験を聴き、被災体験のポスタープレゼンテーション(日本語および英語)を行うことにより、国際的な観点でも防災意識を培うことを目標とする。 また、地域の震災復興住宅に住まう高齢者の方々から被災体験を傾聴や交流を通して、地域の課題を知り、自分たちにできることを考え、実行することを目的とする。			
活動内容及び実績、評価	①NHK エンタープライズ制作本部開発エグゼクティブ・プロデューサーの丸山俊一氏を講師にお迎えし、とくに今日の世界でもっとも注目を浴びている哲学者マルクス・ガブリエルの思想をもとに、現代文明における「生と死」や「いのち」の問題について考えた。学生たちは普段あたりまえに思っている「死生観」がきわめて特殊近代的なものであることを知り、大いに啓蒙啓発された様子であった。より大きい人類史的な視座から、「いのち」の問題を考えたいとの声が多く聞かれた。 ②上の講義を通して得た大きい哲学的・思想的座標軸をもとに、阪神・淡路大震災の復興住宅として建てられた尼崎市市営久々知住宅を訪問、入居者のみなさんと交流して、その被災体験を伺った。このサービスラーニングを受講した学生たちは 2002 年の生まれであるが、そのわずか 7 年前に、これほどの大惨事が起こったという事実、一様に大きな衝撃を受けていた。同時に、改めて歴史を学び、共感を持って当事者への取材を続けながら、この出来事を語り継いでいかなければならないと決意した様子であつ			



た。

③さらに、傾聴を行う交流を計画していたが、緊急事態宣言の発令もあり、個々人が交流し、傾聴を行うことがはばかれた。そこで、個々に傾聴を行うのではなく、交流を楽しんでいただけるよう本学OBであり、自身も地元の神戸で被災した経験を持つ落語家の桂あおば氏を迎え、久々知住宅にて落語会を開催した。緊急事態宣言解

除を待ち、それが行われてすぐに実施したため、三密を避けるために一部の学生はzoomで参加した者も多かったが、入居者のみなさんの大きな笑い声と、「是非このような取り組みを続けてほしい」という感想を受け、直接参加して会場設営に当たった学生たちは、感激を新たにしていた。

④入居者の方には、コロナの影響で交流の機会があまり持てなかったが、学生が久々知住宅を訪れ、震災の思い出を静かにきいてくれたこと、入居者を楽ませるためにイベントを企画し、集う機会の提供を喜んでいただいた。また、疎遠になりつつあった入居者同士の交流行事を見直す機会にもなったようである。

今後も継続して事業を行うことで、大学(学生)と入居者の交流のみならず、高齢者ばかりとなり、疎遠になりつつあった入居者同士の交流の機会も提供していく。そうすることで、住宅全体が活気を取り戻し、交流の機会は安心して暮らせる環境づくりに発展していくと考えられる。



※ 報告書の内容及び掲載写真は、市報、HP等の市の発行する媒体への掲載される場合がありますので、事前に学生等の同意を得た上で、提出をお願いします。